様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　 ９ 月 ２０ 日現在

機関番号：３２７２８
研究種目：若手研究
研究期間：2018～2021
課題番号：１８Ｋ１７５０５

研究課題名（和文）思春期のひきこもり親和性群の心理社会的要因とSNS利用の関連

研究課題名（英文）Relationship between psychosocial factors of adolescent hikikomori affinity group and SNS use

研究代表者
玉田　聡史（Tamada, Satoshi）

湘南医療大学・保健医療学部看護学科・助教

研究者番号：６０８０４５８１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,200,000円

研究成果の概要（和文）：重回帰分析の結果,親和群のインターネット依存傾向を高めるインターネット使用方法はTwitter(β=0.17 P<0.001),オンラインゲーム(β=0.13 P<0.01),ホームページ閲覧更新(β＝0.13 P<0.01),動画(β＝0.10 P<0.05)であった.また親和群のインターネット依存を高める心理社会的要因は，陰性感情に関する要因(β=0.23 P<0.001),学業に関する要因(β=0.13 P<0.01),家族に関する要因(β=0.11 P<0.05)であった.親和群のインターネット依存傾向は,使用方法自体が長時間使用する傾向が高い項目によって高められていた.

研究成果の学術的意義や社会的意義
ひきこもりとインターネット依存は,同時期に生じやすい問題であり,ひきこもり初期にインターネットを依存的に使用することで深くひきこもる可能性がある.そのため,教育機関において親和群に早期介入を行う際,成績不良や,陰性感情が強いなど,有意にインターネット依存傾向を高める心理社会的要因を持つ者へ重点的な介入を行うこと,インターネットの使用についてスクリーニングしTwitterやオンラインゲームなどの使用時間のコントロールを行うことで,親和群のインターネット依存傾向の悪化を防げる可能性が示唆された.

研究成果の概要（英文）：Multiple regression analysis revealed that Twitter (β=0.17, P<0.001), online games (β=0.13, P<0.01), website viewing/updating (β=0.13, P<0.01), and video viewing (β=0.10, P<0.05) were identified as Internet usage factors contributing to their Internet addiction. Furthermore, negative emotion (β=0.23, P<0.001), academic performance (β=0.13, P<0.01), and family (β=0.11, P<0.05) -related factors were identified as psychosocial factors contributing to their Internet addiction. The hikikomori affinity group’s tendency to be addicted to the Internet was exacerbated by activities that frequently lead to a long screen time, and the psychosocial factors influencing it occurred at the initial stage of the hikikomori process, suggesting the effectiveness of addressing these points not only to prevent Internet addiction, but also in terms of early support for hikikomori.

研究分野：看護学

キーワード：ひきこもり　ひきこもり親和性　インターネット依存　心理社会的要因　学生

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

日本でひきこもり状態にある当事者は推計 70 万人に達し,当事者の社会参画を目指した支援が多分野で行われている[1].近年,ひきこもりの前段階であるひきこもり親和性群(以下：親和群)への支援が注目されている.親和群の割合は,一般の人の 15-34 歳にある 1404 名を対象にした研究では全体の 4,8%にひきこもり親和性が認められた[2].親和群は,自己決定の干渉拒否や,罪悪感を一般より抱いている傾向があるが,対人恐怖や暴力の症状が見られない点でひきこもり群とは異なっている状態である[2].思春期の当事者 7 名に対しひきこもりに至り,そこからデイケアへの参加を通じ社会性を再獲得するプロセスを明らかにするインタビュー調査では,ひきこもる前段階では苦悩を生み出す対人関係,ひきこもらないための努力,集団や社会から距離を取り始める,の 3 つのカテゴリと 7 つの概念が抽出された[3].また語りの特徴として,2008 年から日本で広く普及した SNS に関する語りが散見されていた.2008 年以前に実施されたひきこもり群及び親和性群への研究では SNS についての語りはなく,ひきこもりの前段階に新たに登場した SNS をはじめとしたインターネット使用が関連していることが示唆された[3].よって,これらについて定量的に調査をする必要があると考えた.

２．研究の目的

本研究の目的は次の 3 つである.

(1) 思春期にある親和性群の心理社会的要因を抽出し,社会的要因に関する質問紙を作成（以下：自作質問紙）する.

(2) インターネット使用がひきこもり前段階の心理社会的要因に与える影響を明らかにする.

(3) 明らかにされた結果から,インターネット使用の影響を考慮した予防的支援の方法を構築する.

３．研究の方法

(1) 目的①：思春期・青年期のひきこもり当事者のひきこもり前段階もしくは,親和性群に関連した研究の文献検索を実施し,親和性群の心理社会的プロセスの要因を抽出する.対象とする文献は,①研究対象者が思春期・青年期の当事者であること.②SNS が登場した 2008 年以降に実施された研究.以上 2 つの条件とした.2 つの条件を満たす文献を対象に,親和性群の心理社会的プロセスに着目してレビューを行い,ひきこもり前段階の心理社会的要因を抽出する.また,得られた要因を経験の有無や程度について問う SD 法に対応できるよう改変し,自作質問紙を作成する.

(2) 目的②:インターネット調査会社を介し,教育機関に所属する 15-22 歳の者の抽出を依頼し,ひきこもり親和性尺度[1]によるスクリーニング調査を実施する.次に,スクリーニング調査の結果ひきこもり親和性陽性とされた者に対して, インターネット依存尺度[4,5],総務省が実施している通信利用動向調査の家庭用調査票における,利用したことがあるインターネットの機能サービスを問う質問項目[6]を参考に作成したインターネット使用実態に関する調査項目(19 項目)および,目的①で作成したひきこもり前後の心理社会的要因に関する調査項目(26 項目)からなる調査を実施する.

(3) 目的③：目的②に対して実施した調査結果をふまえ,精神科医師 1 名,元行政保健師 1 名,精神保健福祉士 1 名,精神看護学に精通した研究者 1 名,ピアサポーター2 名からなる有識者アドバイザーチームによる会議(以下：有識者会議)を開催し,インターネット使用を踏まえた社会的ひきこもりへの早期介入について意見を募る.

４．研究成果

(1) 思春期にある親和性群の心理社会的要因

文献検索データベースは,医学中央雑誌 Web 版と CiNii Articles を用いた.検索キーワードは「ひきこもり」および「思春期」,「青年」,「プロセス」,「親和性」で全年を対象に検索し 604 件を抽出した.また,「ひきこもり」および「日常生活」の上位語である「人間活動」を含む文献も全年を対象に検索し,267 件を抽出した.さらに会議録と 2008 年以前の文献は除外し 454 件の文献を抽出した.ここからハンドリサーチを行い重複文献を除外し,当事者のひきこもる前後の心理社会的体験が含まれる文献 8 件を選定した.さらに,インター

ネット上で公開されている2008年以降に実施された行政の統計調査で当事者の体験が含まれる報告書2件を追加し,合計10件を対象に文献検討を行った.その結果【家族関係に関する要因】:4項目,【学校にする要因】:6項目,【友人関係に関する要因】:2項目,【コミュニケーションに関する要因】:6項目,【学業に関する要因】:3項目,【陰性感情に関する要因】:5項目の計26項目のひきこもり前後の心理社会的要因を抽出した.

(2) 社会的ひきこもり傾向とインターネット使用の関連

教育機関に所属する15歳-22歳のひきこもり親和性を持つ513名を対象に研究方法(2)の調査を行った.

調査結果に対し,重回帰分析を実施した結果,親和群のインターネット依存傾向を高めるインターネット使用方法はTwitter(β=0.17 P<0.001),オンラインゲーム(β=0.13 P<0.01),ホームページ閲覧更新(β=0.13 P<0.01),動画(β=0.10 P<0.05)であった.また親和群のインターネット依存を高める心理社会的要因は, 陰性感情に関する要因(β=0.23 P<0.001),学業に関する要因(β=0.13 P<0.01),家族に関する要因(β=0.11 P<0.05)であった. 親和群のインターネット依存傾向は,使用方法自体が長時間使用する傾向が高い項目によって高められていた.また,インターネット依存傾向に影響を与える心理社会的要因は,ひきこもりのプロセスの初期段階に生じている心理社会的要因であり,インターネット依存傾向の悪化を防ぐのみならず,ひきこもりの早期支援の点でも有効である可能性が示唆された.

表1:インターネット使用実態がインターネット依存傾向に与える影響

		Bの95%信頼区間		
	標準化β	下限	上限	P値
電子メール	0.05	−0.71	2.25	
ホームページ閲覧更新	0.13	0.35	2.37	**
無料通信APP	0.01	−0.97	1.09	
動画	0.10	0.07	1.49	*
オンデマンド配信動画	−0.05	−0.79	0.24	
オンラインゲーム	0.13	0.24	1.31	**
クイズ懸賞	0.08	−0.11	1.58	
地図・交通情報	0.02	−1.25	1.84	
天気予報	0.04	−1.28	2.70	
ニュースサイト	0.03	−0.83	1.39	
辞書	−0.01	−1.39	1.10	
Eラーニング	0.02	−0.52	0.90	
デジタルコンテンツ購入	0.01	−0.81	1.00	
商品・サービスの購入	0.01	−0.83	1.02	
インターネットオークション	0.08	−0.20	2.31	
Facebook	−0.01	−1.88	1.48	
Twitter	0.17	0.50	1.71	***
Instagram	0.10	−0.04	1.28	
LINE	0.02	−0.90	1.22	
R^2			0.20	
調整済みR^2			0.17	

*:P<0.05 **:P<0.01 ***:P<0.001

表2:心理社会的要因がインターネット依存傾向に与える影響

		Bの95%信頼区間		
	標準化β	下限	上限	P値
家族関係に関する要因	0.11	0.14	3.26	*
学校に関する要因	−0.07	−3.48	0.84	
友人関係に関する要因	0.05	−0.85	2.10	
コミュニケーションに関する要因	0.01	−1.98	2.39	
学業に関する要因	0.13	0.59	3.66	**
陰性感情に関する要因	0.23	1.49	5.52	***
R^2			0.13	
調整済みR^2			0.12	

*:P<0.05 **:P<0.01 ***:P<0.001

(3) 有識者会議による提言

有識者会議を開催した結果,下記の提言が得られた.

1) ひきこもりの初期段階にインターネットの過度な使用に対して介入することは,ひきこもりの深刻化の予防に対して,一定の効果は期待できる可能性がある.
2) インターネット使用により,社会的ひきこもりの解決が困難になる可能性がある一方で,社会とのつながりを促進し回復に繋がっている可能性がある.具体的な支援を検討する上では,インターネット使用用途や時間,目的など個別の背景に十分考慮する必要がある.
3) インターネット依存に加えて,精神的な健康度などの背景となる情報を加えることで,より具体的な支援策を検討できる可能性がある.

引用文献

1) 内閣府：若者の意識に関する調査（ひきこもりに関する実態調査），https://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/hikikomori/pdf_index.html(2017年8月参照)

2) 渡部麻美,松井豊,高塚雄介:ひきこもりおよびひきこもり親和性を規定する要因の検討,心理学研究,81(5):478-484,2010

3) 玉田聡史,松下年子,片山典子:思春期にひきこもった当事者が支援機関に通所するまでのプロセス,日本精神保健看護学会誌,29(1):13-22,2020

4) Young KS:Caught in the net:How to recognize the signs of internet addiction and winning strategy for recovery,37-44,New York,Wiley,1998

5) 長田洋和,上野里絵:日本語版インターネットアデイクションテスト(JIAT)の有用性の検討,アディクションと家族,22(3):269-275,2005

6) 総務省:通信利用動向調査調査票〈世帯用〉,https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/statistics/gaiyo/HR_Q_1.pdf(2020年5月閲覧)

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 玉田聡史　片山典子	４．巻 19
２．論文標題 思春期における社会的ひきこもり傾向とインターネット依存の関連	５．発行年 2022年
３．雑誌名 アディクション看護	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 玉田聡史　片山典子
２．発表標題 COVID-19の感染拡大に伴う緊急事態宣言下における高校生･大学生の不安抑うつ傾向とインターネット依存の関連
３．学会等名 第31回日本精神保健看護学会学術集会抄録集(WEB)
４．発表年 2021年

１．発表者名 玉田聡史　片山典子
２．発表標題 ひきこもり当事者の心理社会的要因に着目した文献検討
３．学会等名 日本アディクション看護学会学術集会
４．発表年 2018年

１．発表者名 Satoshi Tamada　Noriko Katayama
２．発表標題 PREVALENCE OF INTERNET ADDICTION AMONG SENIOR HIGH SCHOOL AND UNIVERSITY STUDENTS UNDER THE EMERGENCY DECLARATION DUE TO THE COVID-19 PANDEMIC
３．学会等名 25th East Asian Forum of Nursing Scholars Conference（国際学会）
４．発表年 2022年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関